



さい帯血バンクNow

第12号

http://www.j-cord.gr.jp/

さい帯血移植が1000例突破



日本における非血縁者間のさい帯血移植は、去る6月12日に2例の移植が行われたことにより、累計でちょうど1000例を突破しました。日本さい帯血バンクネットワークはこの報告を翌13日に厚生労働記者クラブで齋藤英彦会長が記者会見して明らかにしました。当初の予想をはるかに上回るピッチで移植が行われていることを示しています。各さい帯血バンクでは、最近はさい帯血提供の問い合わせや連日のような移植のための出庫などで、うれしい悲鳴を上げているところです。

記者会見する齋藤会長◎と野村正満運営委員長

世界全体の25%を占める

わが国では、1997年2月に神奈川県済生会横浜大付属病院で最初の移植が行われて6年あまりという短期間で、1000例という大台を突破することになりました。全世界では、おそらく4000例ほどのさい帯血移植が実施されているものと思われていますが、その4分の1がわが国で行われていることになります。日本はさい帯血移植大国といえるかもしれません。今後もさらに積極的にさい帯血移植が行われることが予測されており、さい帯血バンクに寄せられている期待も大きなものがあります。

なお、日本さい帯血バンクネットワークではこの1000例突破を記念して、7月27日午後2時半から東京・大手町のサンケイプラザホールで、年次報告会を兼ねた公開シンポジウムを開催することになりました。日本さい帯血バンクネットワークに参加する11のさい帯血バンクからの様々な報告や、1000例までのあゆみ、さらに移植成績の報告などを行う予定です。このシンポジウムには、患者さんやそのご家族をはじめ、たくさんの方々に参加していただきたいと思っております。

日本さい帯血バンクネットワーク年次報告会2003

さい帯血移植1000例突破記念公開シンポジウム

平成15年7月27日（日）
14：30～18：00 報告会・シンポジウム
18：00～19：30 懇親会
（懇親会のみ会費2000円）
会場：サンケイプラザホール
〒100-0004 東京都千代田区大手町1-7-2
（地下鉄「大手町駅」下車 A4・E1出口直結）
主催：日本さい帯血バンクネットワーク

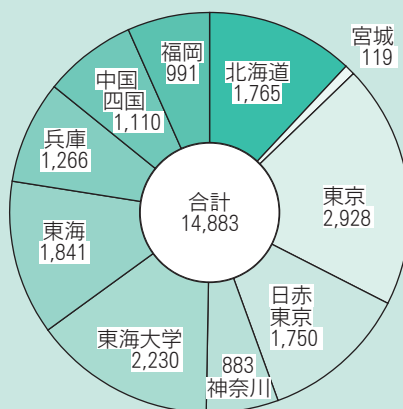
「あゆみ」や移植成績

各バンクから報告も

●各バンクの移植（供給）数

バンク名	～02年度	03年度	合計
北海道	168(171)	26(28)	194(199)
宮城	1(1)	0(0)	1(1)
東京	161(165)	17(20)	178(185)
日赤東京	62(66)	22(25)	84(91)
神奈川	66(68)	6(7)	72(75)
東海大学	114(127)	19(22)	133(149)
東海	140(142)	14(14)	154(156)
兵庫	135(144)	22(22)	157(166)
中国四国	24(25)	5(4)	29(29)
福岡	25(28)	4(4)	29(32)
合計	896(937)	135(146)	1031(1083)

●保存さい帯血の公開数



【注】①表とグラフのデータは、2003年6月末現在。

②表の数字はカッコ外が移植数、カッコ内が供給数。

③移植数は使用数であり、複数さい帯血同時移植（2本のさい帯血を同時に移植）が3例行われているため、累計実移植実施数は1028例。複数さい帯血同時移植は、02年度3月に1例、03年度4月、5月に1例ずつ実施。

さい帯血移植
1000例の意味

成人への拡大を象徴

「善意に感謝」「希望が湧く」 50歳代の患者さん

今年6月12日、日本さい帯血バンクネットワークを介した2例のさい帯血移植が行われて、わが国における非血縁者間さい帯血移植は、1000例となりました。

この日実施されたさい帯血移植の一つは、成田赤十字病院（千葉）で行われました。移植に用いられたさい帯血は6月4日に中国四国臍帯血バンクより供給されたもので、急性骨髄性白血病の55歳の女性に移植されました。その患者さんは「皆様の善意によりさい帯血移植を受けることができ大変感謝いたしております。病気を治すように頑張ります」とのコメントを発表しました。また、主治医は「さい帯血移植の導入により患者さんの治療法の選択肢が増え、今までドナーが得られず移植を断念していた患者さんにもその機会をあたえることができ感謝しています。皆様の善意あふれるご努力に報いるためにもこの治療の成績向上に努力して参ります」と語りました。

また、もう1例は虎の門病院（東京）で、患者さんは54歳になる骨髄異形成症候群の男性で、5月29日に兵庫さい帯血バンクから供給されたさい帯血により、さい帯血移植が行

われました。移植した患者さんは「さい帯血移植をさせていただき、これからは希望が湧いてきました」と語り、主治医は「ドナーが見つからなかった患者さんや早急な移植を要する患者さんにとって、さい帯血移植は福音です。今後はさい帯血を用いたミニ移植で高齢の方々の治療もできるようになるとすばらしいと思います」とコメントしています。

奇しくも2例とも造血幹細胞移植では高齢者に分類される患者さんに移植され、当初対象は小児患者というイメージが強かったさい帯血移植ですが、現在では成人に積極的に行われていることを象徴するものとなりました。

伸び率は急伸展

別表①の年度別移植数の推移を見れば、わが国の非血縁者間さい帯血移植は順調に伸びています。しかし、今年に入ったあたりからその伸び率は加速度的に伸展しています。昨年12月に累計800例となりましたが、そのちょうど半年後に1000例となって、わずか半年間で200例のさい帯血移植が行われたこととなります。特に今年の4月以降の移植数は毎月

40数例が実施されています。このままの傾向で推移すれば、今年度の移植数は500例を大きく上回りそうな情勢となっています。

その一方、骨髄バンクを介した骨髄移植は減少傾向にあります。昨年度は739例でしたが、前年度の749例をはじめて下回りました。対前年同月比での減少傾向は今年度に入っても続いています。

さい帯血バンクと骨髄バンクを介した移植の比較は別表②に掲げましたが、それぞれに利点と欠点があります。しかしながら、いつまでもドナーの出現を待てない患者さんにとっては、骨髄バンクに必要なドナーコーディネートという不可欠な期間が、平均で6カ月という状況がありますから、時間的に切迫した患者さんにとって、さい帯血バンクはこれからますます大きな期待が寄せられるものになると思っています。

しかしながら、疾患によっては骨髄移植の方が移植成績が安定しているところもあって、骨髄バンクの存在は欠かせません。造血幹細胞移植が必要な患者さんにとって、骨髄バンクもさい帯血バンクもともに大切な社会システムです。

表① わが国の年度別非血縁者間さい帯血移植数

年度	症例数	累計数
1996年度	1例	1例（1997年2月実施）
1997年度	19例	20例
1998年度	77例	97例
1999年度	114例	211例
2000年度	169例	380例
2001年度	221例	601例
2002年度	294例	895例
2003年度	105例	1000例（6月12日現在）

※各年度は4月1日から翌年3月末まで

表② 骨髄バンクとさい帯血バンクの比較

	骨髄移植	さい帯血移植
採取場所	手術室	分娩室
採取者	移植専門医	産科医師、助産婦
H L A適合度	1座不一致まで	2座不一致まで
ドナー負担	全身麻酔と入院	なし
コーディネート	必要	必要なし
移植細胞数	十分量確保可能	さい帯血による
G V H D	重症例が多い	重症度は低い
造血機能回復	普通	遅い
再移植	再度調整が必要	すぐに可能
患者負担金	70万～100万円	無料

9月メドに集中論議 共同事業協議会 陽田議長に聞く

今春から「骨髄バンク・さい帯血バンク共同事業協議会」が発足しました。文字通り、骨髄バンクとさい帯血バンクが、一トワーク監事の陽田秀夫氏が委員の互選で就任しました。陽田緒にできることを話し合う場ですが、どちらも最高意志決定機関の意志決定に基づいた委員が選出されて、熱心な議論が行われています。この協議会の議長には、日本さい帯血バンクネットワーク監事の陽田秀夫氏が委員の互選で就任しました。陽田議長に骨髄バンク・さい帯血バンク共同事業協議会に臨む姿勢などを寄稿してもらいました。

「患者さんが同じなのになぜ別々のバンクなの?」「窓口が別々なのは不便」という声は、日本さい帯血バンクネットワークがスタートしてから度々耳にするようになりました。確かに骨髄バンクとさい帯血バンクの利用者である患者さんは同様な疾患の方々であり、移植を行う医療グループ（機関）も同じです。

しかし、バンク事業そのものは全く異質な業務の流れを持っています。対象となるドナーも採取方法も提供に至る流れも、業務に携わる人の業務内容も全く異なるのです。

ネットワークがスタートする前、当時の厚生省「臍帯血移植検討会」においても、骨髄とさい帯血を同一のバンクとするか、異なる組織として事業を行うかについて、ほぼ二分された議論だったように記憶しています。

保存されたさい帯血のHLAや細胞数のデータがインターネットに公開され、検索して適合する細胞がある場合にはすぐにも患者さんの元へ届くという「迅速性」を、さい帯血バンクの最大の特徴にすべきだという考えから、別々に運営する現在の形態になったようです。現在、こうした迅速性を特徴としたさい帯血バ

ンクのシステムは、当初の狙いどおりに稼働していると評価できるのではないのでしょうか。

別々の組織で運営するに当たって、両バンクの連携が必要となる事業については両者が協力して共同事業を行うことになっていました。しかし、両バンクとも自前の事業を推進することにいっぱい、で、「共同事業を開始しよう」と声を掛け合うことができなかったのが実情でした。

前置きが長くなりましたが、ネットワーク発足から3年以上経過した今年4月、ようやく「骨髄バンク・

さい帯血バンク共同事業協議会」が設置され、両バンクから5名ずつの委員が選出され、5月から議論がスタートしました。

議題の主なもの「検索システムの一本化」「患者相談窓口」「国際協力」などです。

予算が伴うことからすぐには実現できないテーマも含まれると思われませんが、「患者さんへのサービス向上」となるテーマばかりです。

9月をメドに集中的に議論し、両バンクへ提言できればと考えています。

5周年準備と検索システム更新

日本さい帯血バンクネットワークは今年、発足して4年目を迎えました。来年は5年目という節目の年を迎えます。この5周年を記念して、5周年記念事業に取り組むことになりました。これまでの歩みを記録に残す作業や、新たにシンボルマークの制定なども含めて、これから本格的な検討と準備を始めることになっています。

本誌の読者の皆さんで、5周年という時にふさわしい記念事業として提起することなどありましたら、事

務局までご提案ください。

また、日本さい帯血バンクネットワークのインターネットを介したさい帯血の公開検索システムは、誰でも患者さんのHLA型と体重を入力すると、2座不一致までのさい帯血を検索できます。システムが本格稼働を始めて3年となりますが、今年度予算でこのシステム更新のための国庫補助金が認められました。今年度中に、より使い勝手のよいシステムを導入すべく検討が行われています。



すこやかに、幸せに。

明日への夢、描きたい。

人から人へ、心から心へ、医療という名のヒューマンなコミュニケーションを広げたい。真の健康を守り、幸福な社会を築くために、優れた医療機器を広くおとどけしているニプロ。

私たちニプロはさい帯血を採取保存する技術でさい帯血バンクを応援致します。



ニプロ株式会社
大阪市北区本庄西3丁目9番3号

あんな委員会 こんな部会①

技術部会は当初、技術指針および管理基準書類の改訂のための作業部会として発足しました。

「臍帯血移植の実施のための技術指針」は平成10年7月27日に当時の「臍帯血移植検討会」によって定められました。当時は安全な医療として本邦のさい帯血移植を推進し発展させることが第一に考えられました。

以来4年近く、さい帯血移植を受ける患者さんの体重については50kgを超える場合が増え、HLA二座不一致の移植が3割以上を占めるなど、さい帯血移植は急速に進展しました。しかしながら、「日本さい帯血バンクネットワーク」の中に改訂作業を担当する機関がなかったこと、他の課題に追われていたこともあり、長らく手つかずでした。そこで原案づくり

技術部会

の部会が設けられたのです。これまでに「技術指針」、管理基準書類の「日本さい帯血バンクネットワーク」としての改訂作業をしています。

その後、作業課題が増えるとともに部会員も10名となりました。基準書類にさらに付加する予定の書類、技術面での評価マニュアルの作成、移植施設でのさい帯血解凍マニュアルの作成などが計画され、部会員が分担して作業中です。

簡単に合意される課題ばかりではありません。例えば造血幹細胞はその測定法からして議論のあるところ。臨床面の解析や内外の文献も参考に、さい帯血移植の安全性、医療現場の利便性、調製・検査現場の効率性も勘案して、新基準を提案していくこととなります。

また、技術交流会の開催を企画する予定です。各地のさい帯血バンクは様々な背景をもち独自に手順を確立させてきました。実際に調製保存作業や検査を行う担当者が一堂に会し、作業理念を共有すること、ついで技術面の統一を図ることが目的です。共通点を確認すれば、基準を提案することが可能になります。

最近ではSARSなど感染症についての情報が得られる度に基準書類の改訂作業が続きます。世界のあちこちでの感染症が基準書類に反映されるので、うかうかしてられないと思いますし、世界中が同レベルに安全であったらいいのに、とも思います。さい帯血移植の適応が広がりつつあるのを目の当たりにするのは、さい帯血バンクに関わるものにとって幸運です。「日本さい帯血バンクネットワーク」がどのように貢献できるか、ご意見をお寄せください。

(部会長：高梨美乃子)

「お子さんのさい帯血の保存をお考えのお母様へ」

さい帯血の私的保存については昨年8月に「日本さい帯血バンクネットワーク」から警告文が発表されました。また本邦には既に複数のプライベートバンクがあるようです。この私的なさい帯血の保存は「日本さい帯血バンクネットワーク」とは全く関係ありません。毎年100万人以上の方が新たにお母様になり、様々な情報を得ていらっしゃると思いますので、改めて注意を喚起したいと思います。

さい帯血の私的保存は理論的には多くの可能性を秘めていると考えられます。ただし、少しの細胞から将来の様々な病気の治療に応用しようとするとき、そのための技術がまだ確立されていないのが現状です。現在確立された技術は「造血幹細胞移植」であり、この目的で使う確率は非常に低く、またかなりの細胞数の保存が必要です（移植する患者さんの体重1kgあたり2000万個以上の

細胞が必要）。

移植に使えるような状態での保存には技術的訓練と多様な管理が必要です。また「赤ちゃんのさい帯血を保存しておけば親の病気にも役立つ」という話を聞いたことがありますが、この点についての倫理的な議論は全くされていません。以下に警告文の抜粋を載せます。

さい帯血の私的保存について

近年、赤ちゃん自身のためにさい帯血を保存しましょう、という企業の宣伝によって、ご出産に際しそうした会社と契約を結ばれている方がおられるようです。ここに一般の方が契約する場合の注意点をまとめましたので参考にしてください。

1. 凍結保存した細胞を、将来白血病などの治療のための移植に使用するには、十分な細胞数が必要です。
2. 「将来いくらかでも細胞を増やせ

る」というのは、まだ確立された技術ではありません。

3. 移植を受けるときは全身の抵抗力が弱っています。せっかくの移植用の細胞に細菌などが混ざっていると危険です。
4. 私的に保存したさい帯血をご本人の移植に使う可能性はほとんどありません。
5. 世界的に自己のさい帯血を用いた移植について、確かな臨床的データはありません。
6. 日本さい帯血バンクネットワークの保存数・登録数は毎月着実にのびています。

「日本さい帯血バンクネットワーク」は、公正・安全・迅速にいまご病気の方の役に立つために活動しています。この事業への末永いご支援をお願いいたします。

ご寄付をいただきました

匿名	5,000円
田代裕之様	100,000円